

## 平成 28 年度海外実習報告レポート

報告者： 1103597m 105 本村悠馬  
実施病院： シンガポール国立大学附属病院  
実施期間： 2016年4月4日～4月15日 血液内科  
2016年4月18日～4月29日 救急診療科

私は個別計画実習 1a、1b 期に、シンガポール国立大学附属病院にて計 4 週間の海外実習を行ってきました。海外での研修は日本と勝手の違う部分も多く、新たな発見や驚きにあふれていました。

シンガポール国立大学附属病院 (National University Hospital: NUH) は病床数 1000 を超える大病院で、シンガポール中心部より車で 15 分ほどかかる、Kent Ridge というベッドタウンに位置します。歴史ある病院ですが、今なお増改築が進められ、3 年前にリニューアルオープンした外来診療棟は目を見張る美しさでした。シンガポールでは MRT という地下鉄が国民の足となっているのですが、NUH の外来診療棟地下一階はその MRT の改札とつながっており、足の不自由な患者さんも通いやすいようになっていました。病院はフードコート、スーパーマーケット、衣料品店、理髪店など有し、非常に便利な作りです。しかし、増築を繰り返した結果、外来診療棟、第一・第二病棟、事務棟のつながりが非常に分かりづらくっており、留学生など慣れない人間に対してはなかなか厳しいものでした。

大学の看板下で



実習初日、行ってきました

外来診療棟の地下は改札になっ  
ている



メンバー全員で宿泊した寮

まず、第1週目、第2週目は、血液内科での研修でした。血液内科では上級医の先生について回り、回診、手技、外来診等の見学をさせて頂きました。上級医はそれぞれレジデント数名を含む自分の診療グループを持ち、病棟の患者さんを分担して診療にあたっていました。上級医はそれぞれ得意とする疾患分野を持っており、外来を担当する上級医によって白血病外来、貧血外来、リンパ腫外来などと分けられていました。上級医は朝のカンファレンスや昼休みの時間を利用して積極的にレクチャーを行い、専門の知識を診療科内で共有していました。基本的に勤務時間内のスタッフ間の会話はすべて英語で行われますが、患者さんとの会話は状況に応じて、英語、様々な方言を含む中国語、マレー語、タミール語などが使い分けられます。特に英語と中国語は、会話文の途中で突然スイッチされることも多々あり、聞いていて非常に驚かされました。私の担当の先生に限らずどの先生、どのスタッフも、英語が流暢でない私たちに対して何事も根気強く説明してくださり、大変助かりました。実習の休憩時間や実習後には、何度もご飯や飲み物を奢ってくださり、医学以外のお話もたくさんさせて頂きました。

昼休みに先生の誕生日会



夕食にも誘って頂きました

第3週目、第4週目は、救急診療科の研修でした。救急診療科では、私の担当の上級医の先生とは出張などが重なりお会いすることができず、毎日違う先生の下指導を受けておりました。NUHの救急診療科は搬送、walk-inともに受け入れており、第一次～第三次救急まで幅広く対応しています。胸痛、腹痛、息切れ、めまいなどの一般的な症状から、硫化水素中毒による昏睡までさまざまな患者さんを見ることができました。救急診療科には国立シンガポール大学（NUS）の3、4回生の学生も実習に来ていました。シンガポールでは学生の段階から実践的な基本的診療手技を徹底的に教え込まれており、実際の患者さんに対して問診、身体所見をとることができるのはもちろん、静脈採血、IVルート留置、血液培養の検体採取、動脈血採血、縫合、尿道カテーテル留置、胃管挿管、気管挿管などの手技を行っていました。初めは上級医の監視、指導の下経験を積むようですが、私が見た段階ではどの学生も問題なく手技は行えるようになっており、上級医の手足として実臨床に携わっていました。安全性の観点などから一概に賛成できるものではありませんが、日本の学生との臨床力の差を痛感し、学生のうちからもっと手技を習得したいものだと感じずにはいられませんでした。現地の学生はととても優しくフレンドリーで、先生の説明だけでは理解できな

かった部分を丁寧に説明しなおしてくれたり、日本語でしゃべりかけてくれたりと、大変心強い存在でした。そのうちの何人かとは連絡先も交換し、今でも連絡を取り合っています。

NUHの実習生  
第三週にお世話になった先生と



台湾、ロンドンからの留学生、先生を含めて

実習はもちろんですが、観光の方も大変充実したものでした。メンバーの一人が留学以前より現地に友達を持っていたため、その友達に連れられて、到着初日からシンガポール観光に明け暮れていました。また、各メンバーがそれぞれの実習先で現地の友人を作ってきたため、毎日誰かが遊びに連れて行ってくれるという状況でした。このことは、英語でコミュニケーションをとるといふことに対する気後れを少しずつ取り除いてくれました。いまだに現地人同士の会話は全く聞き取れませんし、少し複雑な会話になると理解できないことが多いですが、それでも英語だけでなんとか自分の意思を伝えられるという自信がついたことは、私にとって大きな意味のある経験だったと思います。

今回、この素晴らしい経験をさせてくださったシンガポールのみなさん、各国からの留学生たち、共に1か月を過ごした神戸大学のメンバー、宿のマネージャー、そして留学前からサポートしてくださったチューター先生と教務の方々に、心より感謝申し上げます。



最終日、神戸大学シンガポール留学組で